

笠原小学校の英語教育の歩み（2）

第2期（2006年度～2008年度）の研究から

—笠原型コンテンツ・ベイストの確立—

The History of English Education at Kasahara Elementary School from 2006 to 2008.

—Content-based Approach Model designed by Kasahara Elementary & Junior high school—

瀧 沢 広 人

Hiroto TAKIZAWA

1 はじめに

笠原小学校は2003年度に文部科学省より研究開発学校の指定を受け、小学校における英語教育の研究をスタートさせた。2003年と言えば、学習指導要領が2002年に改訂され、総合的な学習の時間の中で英語活動の時間が可能となった時期と重なる。総合的な学習の時間であるので、通常は国際理解の領域の中で英語学習を行うという形になるが、笠原小学校は研究開発学校であったため、総合的な学習の時間から時間を捻出し、「コンテンツ・ベイスト」という時間の中で、1・2年生で年間35時間、3年生以上は年間70時間、小学校6年間で合計350時間の英語の授業を教育課程に組みこんだ。また児童らの進学する笠原中学校では、教科としての英語（当時：315時間）に加え、「コンテンツ・ベイスト」（175時間）の時間を合わせると合計490時間の英語の授業が行われた。小中で合わせると9年間で840時間の時間数となる。

研究開発学校としての笠原小・中学校は、大きな研究テーマを「小中の接続を踏まえて英語教育の在り方～コンテンツ・ベイストの手法を用いて～」と称して、小・中学校9年間を見通したものとなっている。小・中学校9年間での目指す児童像は「中学卒業時に1人でも海外旅行ができるコミュニケーション能力を身につけた生徒」をキャッチフレーズとし、具体目標を「英語を恐れない子」「外国人に臆さない子」「他の表現方法を考える子」をあげている。第1期（2003年度～2005年度）の概要は以下である（表1）。

表1 笠原小学校の英語教育（第1期：2003年度～2005年度）の研究概要

(1) 小学校卒業時に育っていたい姿

相手の話を積極的に聞こうとし、自分の思いを進んで話そうとする。

英語を聞いて相手の意思を理解すると共に、英語や身振り、具体物などを使って自分の意思を相手に伝える。

相手や場に応じて柔軟に対応し、話題を広げて楽しく英語で会話する。

(2) 研究テーマ及び研究仮説

研究テーマ

英語に慣れ親しみ、進んで使おうとする子の育成 ～CBAEの手法を取り入れて～

研究仮説

児童の論理的思考や知的好奇心に訴える教科の内容を取り入れた英語活動の実践をし、日常生活に広がっていけば、英語に慣れ親しみ、進んでつかおうとする児童を育成することができる。

(3) 指導体制

E学習（コンテンツ・ベイスト）

学級担任が主となり、ALT（外国人指導助手）、JTE（日本人英語教師）の3者による英

語活動の授業を行う。

E 活動

朝活動の時間 (8:15~8:30) に行う英語に慣れ親しみ、進んで英語を使おうとすることを
目指した時間や、朝の会、帰りの会を英語で行う日常活動を行う。

E 体験

E 体験とは、実際に英語を用いた体験を行う。外国人を学校に招いたり、放送委員会による英語による校内放送を行ったりするなど、英語を用いた環境を整備し、体験活動を行う時間である。

(4) 成果と課題

- ・英語に興味関心をもち、英語を身近に感じる児童が多くなった。
- ・積極的に英語を使っていこうとするまでには至っていないが、挨拶などの慣れ親しんだ英語の表現を使う姿が多くなってきた。
- ・「CBAE 学習」は、児童の知的欲求を満たすことができるような学習過程が仕組みやすくなるため、特に高学年において有効に働くことがわかった。

2 本研究の目的及び方法

本研究の目的は、2020 年からの全国一律に教科書を用いる授業が行われることに鑑み、小学校英語授業の創設期の授業実践や内容、思いを書き残すことにある。本研究は、2006 年度~2008 年度の第2期の研究について、整理記録するものである。

笠原小・中学校が作成した研究開発実施報告書第1年次 (2007) 及び、研究開発実施報告書第2年次 (2008)、研究開発実施報告書 H18 年度~H20 年度研究のまとめ (2009)、年間指導計画・実践資料 (2008) を参考に、第1期の研究と比較しながら整理記録する。

3 笠原小学校 第2期の研究 (2006 年度~2008 年度)

3.1 笠原小学校の卒業時に目指す児童像

小・中学校の目指す児童像は上記のとおりであるが、小学校6年間の卒業時の目指す児童像は、次のようになっている (表3)。3つ目の「相手や場に応じて柔軟に対応し、話題を広げて楽しく英語で会話する」については、第2期になって削除されている。

表3 小学校卒業時に目指す児童像

第1期 (2003~2005 年度)	第2期 (2006~2008 年度)
〔関心・意欲・態度〕 相手の話を積極的に聞こうとし、自分の思いを 進んで話そうとする。	〔関心・意欲・態度〕 相手の話を積極的に聞こうとし、自分の思い を進んで話そうとする <u>子</u>
〔聞く・話す〕 英語を聞いて相手の意思を理解すると共に、 英語や身振り、具体物などを使って自分の意思 を相手に伝える。	〔聞く・話す〕 英語を聞いて相手の意思を理解すると共に、 英語や身振り、具体物などを使って自分の意思 を相手に伝える <u>ことができる子</u> 。
〔コミュニケーション〕 相手や場に応じて柔軟に対応し、話題を広げ て楽しく英語で会話する。	削除

3.2 笠原小学校の児童の実態

笠原小学校は、研究全体構想図において、児童の実態を次のように捉えている（表4）。年次ごとに児童の実態に変化が見られ、項目の追加や削除が見られ、児童の実態を正確に捉えようとしている。

〔挨拶や受け答え〕では、2年次の「自分の知っている表現で伝えようとする」から、3年次の「自分の知っている表現で積極的に伝えようとする」と変更され、伝えることへの積極的な面が児童に見られるようになったことの成長が伺える。

また、〔話を聞く力〕でも、2年次には「大まかに意味を理解できる」であったものが、3年次では「類推しながら意味を理解できる」となっており、質的な向上が見られる。

さらに、〔コミュニケーション力〕では、1年次では、躊躇する面が見られていたが、2年次には、「外国のゲストの方などに、耳慣れた言葉や手振り身振りを使って何とか思いを伝えようとする態度が養われつつある」とあり、「躊躇」から「何とか思いを伝えようとする態度」への変化に教員が気づいていることがわかる。また3年次では、そのような態度が「育ってきている」とあり、指導の積み重ねにより、児童の「何とか伝えようとする態度」が安定してきていることが読み取れる。

さらに、1年目にはなかったカテゴリーの項目〔英語の授業への興味関心〕が、2年目に新たに加わり、3年目も継続標記されている。

表4 笠原小学校の児童の実態 * [] 内のカテゴリー化は筆者が記す。

2006年度（第1年次）	2007年度（第2年次）	2008年度（第3年次）
〔挨拶や受け答え〕 ・英語に対する興味や関心が増し、進んで挨拶をしたり、簡単な表現の受け答えをしようとする児童が増えた。	〔挨拶や受け答え〕 ・英語に対する興味や関心が増し、挨拶や簡単な表現の受け答えを <u>自分の知っている表現で伝えようとする</u> 児童が増えた。	〔挨拶や受け答え〕 ・英語に対する興味や関心が増し、挨拶や簡単な表現の受け答えを自分の知っている表現で <u>積極的に</u> 伝えようとする児童が増えてきた。
〔話を聞く力〕 ・ALTやHRT、JTEの使う英語を注意深く聞こうとし、大まかに意味を理解できる児童が多い。	〔話を聞く力〕 ・ALTやHRT、JTEの使う英語を注意深く聞こうとし、大まかに意味を理解できる児童が多い。	〔話を聞く力〕 ・ALTやHRT、JTEの使う英語を注意深く聞こうとし、 <u>類推しながら</u> 意味を理解できる児童が多い。
〔コミュニケーション力〕 ・聞き取れないことや分からないことを相手に伝えたり、同感したり、相づちを打ったりして、話をつなげようとする態度に弱さがみられる。 ・耳慣れた英語を自然に発する子が増えてきたが、高学年になるほど伝えたいことがあっても躊躇しがちである。	〔コミュニケーション力〕 ・ <u>外国のゲストの方などに、耳慣れた言葉や手振り身振りを使って何とか思いを伝えようとする態度が養われつつある。</u>	〔コミュニケーション力〕 ・外国のゲストの方などに、耳慣れた言葉や手振り身振りを使って何とか思いを伝えようとする態度が <u>育ってきている</u> 。
	〔英語の時間への興味関心〕 英語の時間を8割以上の子どもが楽しいと感じている一方、むずかしいと考えている子は、2割いる。	〔英語の時間への興味関心〕 英語の時間を8割以上の子どもが楽しいと感じている一方、むずかしいと考えている子は、2割いる。

3.3 研究テーマ設定について

3.3.1 研究テーマについて

第2期の1年次(2006年度)の研究テーマは、「英語に慣れ親しみ、進んでつかおうとする子の育成～コンテンツ・ベイストの手法を取り入れて～」であった。このテーマについては、第1期とほとんど変わらないが、2年次・3年次(2007・2008年度)では、「笠原型コンテンツ・ベイスト」と、「笠原型」と名付けている点で大きく変更である(表5)。このことは、第1期からの試行錯誤で研究してきたコンテンツ・ベイストの手法が、はっきりと安定した型になったことを示す。コンテンツ・ベイストの授業のやり方が、児童にも職員にも定着し、成果が見られたことが伺える。

表5 年次ごとの研究テーマ

1年次 (2006年度)	2年次 (2007年度)	3年次 (2008年度)
英語に慣れ親しみ、進んでつかおうとする子の育成 ～コンテンツ・ベイストの手法を取り入れて～	英語に慣れ親しみ、進んでつかおうとする子の育成 ～ <u>笠原型</u> コンテンツ・ベイストの手法を取り入れて～	

3.3.2 目指す児童の姿について

1年次・2年次は、目指す児童の姿は同じである。しかし、3年次には、表6のように、より具体的な行動表現になっている。

表6 目指す児童の姿

1年次 (2006年度)	2年次 (2007年度)	3年次 (2008年度)
〔関心・意欲・態度〕 相手の話を積極的に聞こうとし、自分の思いを <u>進んで話そう</u> とする子 〔聞く・話す〕 英語を聞いて相手の意思を理解すると共に、英語や身振り、具 体物などを使って自分の意思を相手に伝えることができる力を持 つ子		〔関心・意欲・態度〕 うなずき、問い返し、確認等 をしながら、話し手の意思を <u>進 んで聞こう</u> とする児童
		〔聞く・話す〕 身振り、ジェスチャー、実物等 を工夫し、 <u>聞き手の理解を確 めながら</u> 話そうとする児童

3.3.3. 笠原型コンテンツ・ベイストについて

コンテンツ・ベイストは、「内容を重視した英語学習法」であり、児童は知的興味をもって英語活動に取り組めるようになってきている(『平成18年度研究開発実施報告書第1年次』p.22)。

コンテンツ・ベイストの手法を取り入れる理由と利点については、年次ごとに多少の文章標記は違うものの、おおよその考えについては、変化はない。しかしながら、わずかな変化としては、利点①において、コンテンツ・ベイストの手法を取り入れることで、「児童は目的を持って活動するようになる」としているが、3年次では、「そこには『話したい・聞きたいという思い』『話す・聞く必然』が生まれ、意味のある英語の枝葉によるコミュニケーション活動が生まれる」という文言を付け足し、なぜ児童が目的を持って活動するようになるのかを示す理由が足されている(表7)。

また、利点②では、1年次の「仮に外国語でホームステイを体験するようなことがあったとき」を2年次では、「外国の人と話をしたり、一緒に生活をする中で」というように、より広い範囲での活用

表7 利点①「問題解決的な英語活動が展開できる」

1年次 (2006年度)	2年次 (2007年度)	3年次 (2008年度)
<p>教科の授業に問題や課題があるように、英語活動にも問題や課題を設定することによって、その解決のために児童は目的を持って<u>活動をしなればならない。</u></p> <p>児童にとって共通の内容で、興味があることであれば、楽しく活動し、より英語が身に付くことが期待できる。さらに、単なる活動に終わらず、知的側面を刺激するような楽しさを味わわせることができる。</p>	同左	<p>教科の授業に問題や課題があるように、英語活動にも問題や課題を設定することによって、その解決のために児童は目的を持って<u>活動するようになる。</u> <u>そこには「話したい・聞きたいという思い」「話す・聞く必然」が生まれ、意味のある英語の枝葉によるコミュニケーション活動が生まれる。</u></p> <p>児童にとって<u>教科の内容は</u>共通の<u>話題</u>となる。興味があることであれば、<u>互いに楽しく</u>活動し、より英語が身に付くことが期待できる。さらに、単なる活動に終わらず、<u>教科の本質に結び付いた</u>知的側面を刺激するような楽しさを味わわせることができる。</p>

表8 利点②「コミュニケーションに有効に働く内容で英語活動が展開できる」

1年次 (2006年度)	2年次 (2007年度)	3年次 (2008年度)
<p>英語でコミュニケーションを図ろうとするとき、コミュニケーションを図る意欲や能力と同時に、コミュニケーションを図る話題つまり内容が必要になる。その多くは、<u>自分や自分の身の回り、地域、我が国の文化や伝統に関わる</u>ことである。</p> <p>こうしたことは、その多くを教科の内容と共通させている。単なる旅行ではなく、<u>仮に外国語でホームステイを体験するようなことがあったとき、</u>教科の内容を取り入れた英語活動を体験しておくことは、<u>そこでのコミュニケーションに大いに</u>役立てることができる。</p>	<p>英語でコミュニケーションを図ろうとするとき、コミュニケーションを図る意欲や能力と同時に、コミュニケーションを図る話題つまり内容が必要になる。その多くは、<u>子ども自身や子どもの身の回り、地域、我が国の文化や伝統に関わる</u>ことである。</p> <p>こうしたことは、その多くが<u>教科の素材</u>や内容と共通する物である。<u>子どもにとって身近で広範囲の</u>教科の内容を取り入れた英語活動を体験しておくことは、<u>外国の人と話をしたり、一緒に生活をする中で</u>のコミュニケーションに大いに役立てることができる。と考える。</p>	<p>英語でコミュニケーションを図ろうとするとき、コミュニケーションを図る意欲や能力と同時に、コミュニケーションを図る話題つまり内容が必要になる。その多くは、<u>児童自身や児童の身の回り、地域、我が国の文化や伝統に関わる</u>ことである。</p> <p>こうしたことは、その多くが教科の素材や内容と共通する物である。<u>児童にとって身近で広範囲の</u>教科の内容を取り入れた英語活動を体験しておくことは、外国の人と話をしたり、一緒に生活をする中で<u>のコミュニケーションに大いに</u>役立てることができる。と考える。</p>

が期待されることを示唆している。さらに、単なる「教科」ではなく、「子どもにとって身近で広範囲の教科」というように、教科の範囲も示していることに注目したい (表 8)。

3.3.4 研究仮説について

研究仮説については、年次ごとの変化はなく、下記である (表 9)。ここで言う「教科の内容を素材とした英語活動を実践し」が、コンテンツ・ベーストの考え方であり、単位時間における授業 (E 学習) のことを指している。また、そのコンテンツ・ベーストで学習した英語を「日常生活に広げていけば」ということは、E 活動・E 体験ということになる。E 活動とは、朝の英語活動や英語で行う朝の会や帰りの会等を指す。E 体験とは外国の人たちとの交流活動また異年齢間による英語交流となる。

表 9 第 2 期の研究仮説

児童の知的な好奇心に訴えるために、教科の内容を素材とした英語活動を実践し、日常生活に広げていけば、英語に慣れ親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうとする児童を育成することができる。

3.4 英語活動の時間 (E 学習) について

3.4.1. 英語活動 (E 学習) における児童の実態

E 学習 (英語活動) における児童の実態を次のように挙げている (表 10)。

表 10 E 学習における児童の実態

第 1 期 (2006 年度)	第 2 期 (2007 年度)	第 3 期 (2008 年度)
〔低学年〕 活動そのものを楽しみを覚えるという特質がある。体を動かすことに喜びを感じる。聞こえた通りに真似をして発音をし、間違えることを恐れない。同じ言葉や活動を繰り返すことに抵抗がない。	〔低学年〕 同左	〔低学年〕 同左
〔中学年〕 知的な好奇心が旺盛になってくる。些細なことにも説明を必要とする場合がある。	〔中学年〕 知的な好奇心が旺盛になってくる。些細なことにも説明を必要とする場合がある。 <u>真似をすることがなくなり出す。</u>	〔中学年〕 知的な好奇心が旺盛になってくる。 <u>うなずきや確認をしながらよりよく聞こうとする姿が生まれてくる。簡単な英語を用いて、問答したり自分の考えなどを伝えたりできるようになる。</u>
〔高学年〕 目的をはっきりさせて活動をする意欲が強くなる。単純な繰り返しを好まなくなる。正確さを強く求めようとする。間違えることを恐れるようになる。	〔高学年〕 目的をはっきりさせて活動をする意欲が強くなる。単純な繰り返しを好まなくなる。正確さを強く求めようとする。 <u>不必要に身体表現を求められたりすることに抵抗を感じる。</u> 間違えることを恐れるようになる。	〔高学年〕 目的をはっきりもち、活動する意欲が強くなる。 <u>単純な繰り返しから知的な活動へと高まっていく。既習の表現や身振り・写真等を駆使して、よりよく伝えようとする姿勢が生まれてくる。</u>

これによると、児童の実態として、次のように整理されそうである（表 11）。

表 11 児童の発達段階

低学年の特徴

- ・活動そのものを楽しむ。
- ・体を動かすことが好き
- ・聞こえた通りに真似をする
- ・間違えることを恐れない
- ・繰り返すことに抵抗がない

中学年の特徴

- ・知的好奇心に目覚め始める
- ・説明を求める
- ・真似をすることがなくなり始める
- ・うなずいたり確認したりしながら聞くようになる
- ・簡単な英語を使って問答ができる

高学年

- ・活動に目的を見出すようになる
- ・単純な繰り返しを好まない
- ・正確さを求め始める。
- ・体で表現することに抵抗を感じる
- ・間違えることを恐れる
- ・既習表現や身振り、写真等で伝えようとする気持ちが生まれる

これらの実態から、低学年については活動そのものを純粋に受け入れる傾向がありそうである。「活動を楽しむ」「体を動かすことが好き」「真似をする」「間違いを恐れない」「繰り返しに強い」という英語学習においては、すべて肯定的な実態と捉える。

しかし、中学年になると知的好奇心が目覚め始めると同時に、説明を求めたり、単純な真似をしなくなったりするなど、今まで純粋に受け入れていたものが認知の発達により、良い意味では自分で考えるようになり、すべてを受け入れない様子が出てくる。一方、言語発達の面では、「うなずいたり確認したりしながら聞く」や「簡単な英語を使って問答する」などの成長が見られる。

高学年では、より知的好奇心が増し、「活動に目的を見出す」「単純な繰り返しを好まない」「正確さを求める」と言った認知発達に伴い、知的な学習を求めるようになる。また、メタ認知の発達により、「体で表現することに抵抗を感じる」「間違えることを恐れる」と言った他人の目から見た自分を見るようになり、自分の行動に消極的になる面も芽生える。しかしながら、「既習表現や身振り、写真等で伝えようとする気持ちが生まれる」という面も見られ、児童を上手に指導し、導いていけば、よりよい姿として成長していくが、一方、英語嫌いを生むことになるという両面が発生してくると考える。

3.4.2 各学年の目標

以上のような児童の実態を踏まえ、各学年の目標を次のように設定している（表 12）。

表 12 各学年の目標

- <つくし学級> 英語を聞いたり、話したりすることの楽しさを味わうことができる。
- <1・2年> 英語を聞いたり、話したりすることの楽しさを味わうことができる。
- <3・4年> 英語を聞いたり、話したりする活動を通して、コミュニケーションを図ることの楽しさを味わうことができる。
- <5・6年> 互いの気持ちや考えを英語で伝え合う活動を通して、コミュニケーションを図ることの楽しさを味わうことができる。

3.4.3 E 学習（1 単位時間）の授業の流れ

「平成 20 年度研究開発実施報告書」に 1 単位時間の流れが出ている（p.28）。これについては、第 1 期と構成が異なっており、第 1 期では、「Greetings & Song Time」「Practice」「Activities Time」

「Comments」と4展開になっていたが、第2期では次のように「Greetings & Song Time」「Activities Time」「Comments」の3展開になっている。このことは、「平成18年度研究開発実施報告書」の中で「学習過程を3つのステップ（Greeting→Activities→Comments）にしたことによって、子ども意識がとぎれることなく自然に課題解決に入っていけるようになってきた（p.48）」とあり、課題解決型の授業としての1つの流れを提案している。

(1) Greetings & Song Time

Greetings と Song Time では、簡単な挨拶、英語の歌などを行い、本時の英語活動への意欲付けや授業の雰囲気づくりをする。なお、英語の歌については、授業の題材と関連あるものを用いたり、単元の表現等に慣れさせたりする。

(2) Activities Time

Activities Time では、課題解決型の授業を行う。

① 課題の設定

「～しよう」とだけでなく、その活動で得た情報をもとある問題を解決するという「問題解決学習：タスク」を設定するようにする。例えば、次の例を挙げ、「家での生活について聞き合おう」は「～しよう=Let's」だけであるが、そこを Let's +タスクにし、「家での生活について聞き合い（Let's）、一番早く起きる子を探そう（Task）となる。つまり、何のために尋ね合うのか目的をはっきりさせるわけである。

② 課題解決のためのモデルを示す

どのような表現を用いて、どのように行うのかのイメージを具体的に持たせる場を設定している。方法としては、最初に教師によるモデル提示（T-T）を行い、次に教師と児童（T-S）によるモデルの提示、また児童同士（S-S）のモデル提示を行い、活動のイメージをもたせるようにする。いよいよ児童の活動である③課題の解決にはいる。この段階は5段階ある。

ア) コミュニケーション活動Ⅰ

これは、モデル提示をもとに児童同士で尋ね合う場面である。留意点としては、話し手だけが一方的に話すのではなく、聞き手の反応や質問等を交えながら行う。また意味のある言語活動を行うという観点から、暗記した分をそのまま用いることのないようにさせる。

イ) よさの認めと問題点の解決

ア) の活動を振り返り、児童のよい姿を認めたり、定着が弱い表現などを取り上げて反復練習をする場を設定する。いわゆる中間評価である。

ウ) 自分の表現等の再校正化

イで振り返ったことをもとに、各自で練習する場を設定し、よりよい表現を作り上げる時間である。

エ) コミュニケーションⅡ

ウの成果を発揮し、さらに豊かなコミュニケーション活動を行うことを目指す。

オ) 課題の解決

コミュニケーションⅠとⅡを通して、課題の解決を図る。先ほどの課題の例では、「一番早く起きる人は誰かな」と全体で振り返る。

(3) Comments Time

本時のねらいに関わって、事故の伸びを実感したり、題材に関わって学んだことを確認したり、次時への方向を明らかにする。教師の評価は、HRT, ALT, JTE が役割分担をして評価する。評価の観点として、①進んで英語を使おうとする ②進んでコミュニケーションをしようとする意欲的な姿 ③Eye Contact, Clear Voice, More English を意識してコミュニケーションしようとする姿 ④進んで仲間と関わろうとする姿 の4つがある。

児童の評価は、①評価カードに記入する ②ワークシートに記入する ③学習して思ったことについて発表する ④教師の評価に関わる質問に対し挙手する

3.5 児童の定着度の実態調査

3.5.1 意識調査

平成 20 年 1 月に、児童への意識調査を行っている。表にまとめる（表 13）。

表 13 児童への意識調査

(1) 学校で行う英語の勉強（英語活動）は楽しいですか。（単位は％）

	小 1	小 2	小 3	小 4	小 5	小 6
楽しい	96	96	99	98	98	99
楽しくない	4	4	1	2	2	1

(2) 英語活動で英語を聞いたり話したりできましたか。（単位は％）

	小 1	小 2	小 3	小 4	小 5	小 6
できた	95	97	99	98	100	100
できない	5	3	1	2	0	0

(3) 外国の意図に英語で挨拶されたら自分はどうすると思いますか。（単位は％）

	小 1	小 2	小 3	小 4	小 5	小 6
英語であいさつする	65	60	51	43	44	36
恥ずかしいけど英語で	14	33	41	39	48	56
英語で行う 計	79	93	92	82	92	92

3.5.2 技能調査

平成 19 年度（平成 20 年 1 月実施）では、リスニング及びスピーキングテストを行い、児童の実態を調査している。調査語彙及び表現は以下である。表現については、挨拶や短い対話文を聞き、場面をつかむ問題である。

リスニング

〔語彙〕 1. desk 2. organ 3. winter 4. pizza 5. tiger 6. animals 7. bicycle 8. XYZ 9. ABC

10. finger 11. fall 12. brown 13. pen 14. purple 15. notebook 16. dinner 17. dog 18. wash
19. eyes 20. hungry

〔表現〕 21. “How are you?” “Fine, thank you. And you?”

22. I play the piano.

23. “Nice to meet you, Mike”. “Nice to meet you too”.

24. “Tell me the way to the station”. “Go two blocks and turn left”.

25. My hobby is watching games on TV.

スピーキングテスト

〔対象〕 各学年 1 クラス

〔方法〕 描写力の測定 児童は 1 分間、1 枚の絵を見た後、何が書かれていたのかを英語で伝える。

〔分析〕 児童の発話を文字起こす。情報数（児童の発話数）を調べる。単語、句、文の 3 つの分け、発話の質を測る（表 13）。

表 13 スピーキングテストにおける児童の平均発話量の概数

	小学1年	小学2年	小学3年	小学4年	小学5年	小学6年
単語	5.9	6.7	7.9	7.6	1.4	5.5
句	0.1	0.8	0.7	1.4	3.8	1.8
文	0.0	0.0	0.1	1.0	1.8	4.0
合計発話数	6.0	7.5	8.7	10.0	7.0	11.3

* 「平成19年度研究開発実施報告書 第2年次」のグラフより数を概算 (pp.54-55)

4 考察

笠原小学校における第2期の研究を整理した。第1期から大きく研究が深まっている点が3つある。

1つ目は、第1期に始まったコンテンツ・ベイストの手法を取り入れた授業が安定し、「笠原型」と命名している点である。これにより、1単位時間の授業の流れが定着し、児童にも効果を示していることがわかる。しかしながら、「笠原型」という定義が確定されておらず、何をもちいて笠原型とするのかが明確でない。第1期、第2期において、コンテンツ・ベイストの手法を取り入れるための条件については、検討がされている。しかしおそらく検討している状態であり、確かに必要な要件として手字するには、次の第3期を待つことになる。

2つ目は、児童への英語技能における「実態調査」である。内容は、語彙や表現を聞いて理解するリスニングパートと、絵を描写し英語の発話量や発話の質を調査するスピーキングパートの2つである。語彙や表現の理解も小学校6年生ではほぼ全員(100%)が理解を示し、スピーキングにおいては、小学校5年生で一旦落ち込むものの学年が進行するにあたり、発話数が伸びている。5・6年になると、単語から句や文で言う数が多くなり、乳幼児での1歳での1語文、2歳での2語文といった過程を辿っていることがわかる。笠原型コンテンツ・ベイストで指導した成果を児童の技能の達成度で測っている点は、第1期からの研究の深まりと言える。

3つ目は、1時間の英語活動の時間構成の修正である。第1期では、4つのステップで1時間単位の授業を行っていたが、第2期では、「挨拶・歌」「活動」「振り返り」と大きく3つのステップになっている。このことは、より笠原小学校の研究の中心となる「問題解決的な学習」に近づくとしている。

5. おわりに

笠原小学校では、英語活動の時間の他に、英語に慣れ親しむ時間のE活動や、英語を用いてコミュニケーションを図る時間のE体験など学校全体として英語教育に取り組んでいる。E学習では、えいごリアンを教材に、1つのKey sentenceを4回に分けて学習する。E体験では、ハロウィンの会やスターフェスティバル、留学生のインターン、中学生による絵本の読み聞かせなどを行い、英語活動の時間で慣れ親しんだ英語表現を楽しんで使う場を設定している。英語活動の時間以外でも、有効な学習経験となっている。

参考文献

笠原町立小学校・笠原中学校 (2007) . 「平成18年度 研究開発実施報告書 第1年次」
 笠原町立小学校・笠原中学校 (2008) . 「平成19年度 研究開発実施報告書 第2年次」
 笠原町立小学校・笠原中学校 (2009) . 「平成20年度 研究開発実施報告書 (H18年度～H20年度研究のまとめ)」
 笠原町立小学校・笠原中学校 (2009) . 「《平成18・19・20年度 文部科学省指定》研究開発学校 (英語) 年間指導計画 (笠原小学校) 実践資料 (笠原中学校)」